

本稿の切っ掛けはかなり偶然の出来事によっている。幕末から明治初期にかけて、日本で活躍したイギリスの外交官サトウ (Ernest Satow) の足跡をたどるうち、当時在日外国人は横浜で学術講演会がもたれていたが、それらは報告として日本アジア協会誌に登場していることを知った。そのサトウの論文の前にアトキンソン (Robert W. Atkinson) (図-1) が極めて興味ある論考を寄せている (Atkinson 1879)。それは明治13年夏に1ヶ月かけて中部山岳の八ヶ岳、白山、剣岳の踏査報告で、そこには植物採集の記録が残されていた。この報告は重要な情報が含まれているにもかかわらず、筆者の知る限り余り知られていないと思われるのでその概略を紹介したいと思ったのである。このアトキンソンは、1877年に創立されたばかりの東京大学理学部化学科の分析化学・無機化学の教授である。いわゆるお雇い外国人教師であり、日本化学会の創設、桜井錠二他の日本の化学者の育成に貢献している。彼の守備範囲は広く、低温殺菌法はパスツール (L. Pasteur) の始めた殺菌法として広く知られているが、日本の酒造家はそれに先立つこと300年前からルーティーンとして同様な方法を行っていたことに気付いて、知らしめた人である。ここで紹介する内容は彼のもっと別な意外というべき側面である。

アトキンソンの姿勢

この論文でもう一つ注目すべきは、報告の内容から彼の旅行が科学的探査の姿勢が明確であることである。単に未知の領域 (terra incognita) を踏査することではなく、例えばかつてのイギリスのエヴェレスト登山隊にも見られた姿勢である。当時、日本の海岸線は伊能忠敬の精密な測量で明らかになっていたが、内陸は地図もおおざっぱであり、山岳の標高も全く未同定であったが、それは国土地理院の前身「参謀本部陸地測量部」の活動以前であったからである。このため、彼らはアナロイド気圧計をサトウから借り、旅行中毎日複数回計測を行っている。しかも、その測定値は旅行の後、東京の加賀屋敷 (現東京大学本郷キャンパス) に住むお雇い外国

人の物理学教授メンデンホール (T. Mendenhall) により行われていた温度補正を行った水銀気圧計のデータと対比させて補正している。彼等の高度推定は十分な根拠のあるデータであった。また、訪問先での植物標本は複数用意して東京へ送付し、一部はカビによって毀損されたものがあつたものの、それらは当時助手であり、後に植物学教授となる松村任三によって同定が行われた。その上に、微笑ましいことには傾斜のきついところでは靴は滑ってしまうので草鞋を用いた方がいいと言っており、実際に使用していることであり、有用であれば日本の習慣にも従っていることである。

旅程抄録

アトキンソンは、ディキソン (William Dixon) 教授、日本人の中沢岩太とともに、1879年7月16日に加賀屋敷を出発してこの旅行に出たが、それは三つに分かれるので、それぞれについて紹介する。

東京から八ヶ岳：アトキンソンらは、加賀屋敷を出発して中山道をとって板橋へ出て、そこから川越街道へ入り、川越、飯能を経て正丸峠を越え秩父へ達した。必要に応じ人力車を利用し、人夫も雇い、馬や牛を荷物の運搬に用いた。秩父からさらに荒川の上流を遡り、栃本を経て十文字峠を越え信州側へ下った。十文字峠では、オウレン、ミヤマオダマキ、オサバグサ、キツリフネ、ハクサンサイコ、ギンリョウソウ、ツマトリソウ、ミヤマクワガタなどを採集している。その後、千曲川に沿って少し下り、海の口から八ヶ岳へ向かって、本沢温泉に達した。そこから、硫黄岳 (箕冠山とよんでいる)、横岳 (地藏山とよんでいる) から赤岳に向かったが、悪天のため途中で引き返した。それでも硫黄岳付近の植物採集を行っている。そこでの採集品は、コマクサ、キバナノコマノツメ、イワハゼ、イワウメなどである。当時、山名が場所によって異なって認識されていることも指摘している (図-2)。その後、本沢温泉から夏沢峠を越えて諏訪側へ向かい、途中神ノ原 (茅野市) に泊っている。この場所は筆者の育った場所

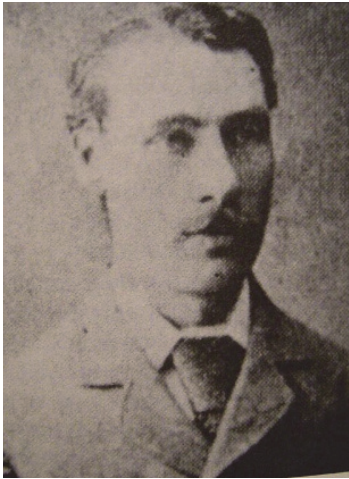


図-1 アトキンソン

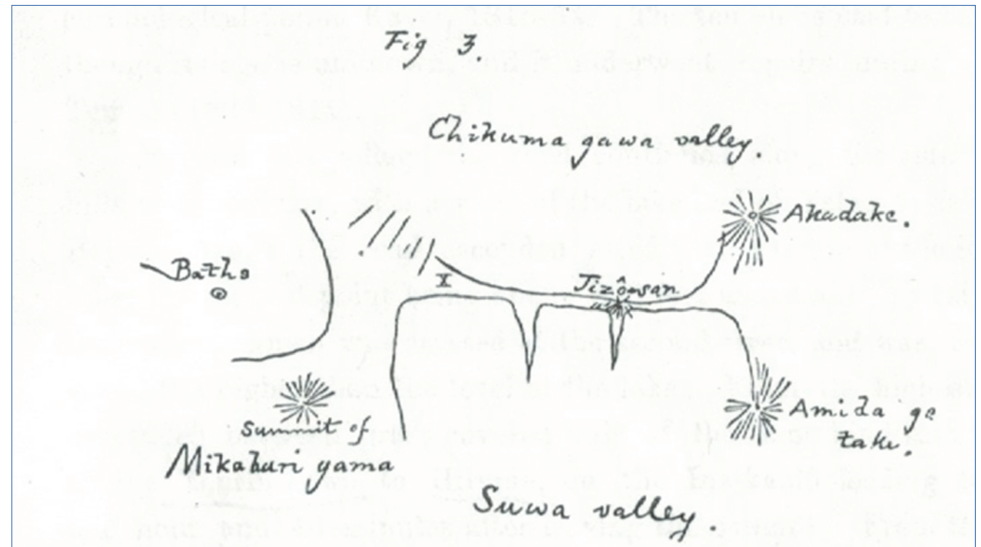


図-2 アトキンソンの論文に書かれた八ヶ岳略図

から 3km ほどであり、本沢温泉の経営者は今日でも神ノ原出身の原田氏であるので、その関りでこの部落に宿を取ったものと推定される。

白山へ：その後は、宮川を越えて諏訪神社を過ぎ、諏訪盆地を諏訪湖の西側に沿って横断し、有賀峠を越えて伊那谷へ入った。平出、伊那部を通して後天竜川を渡り、中央アルプス北部の権兵衛峠を越えて木曾谷へ入った。権兵衛峠では、ホトトギス属植物を採集している。木曾では宮ノ越、木曾福島を経て御嶽講の宿坊にも泊って、さらに王滝を通り、峠を越えて飛騨側へ向かった。御厩野、加子田を現代の地図で辿れるが、下呂から峠を越えて白川郷へ入った。当時下呂から白川への道程の情報がほとんど得られないことに著者らは困惑している。今日ではダムで知られる御母衣を経て白川郷に入ったが、ここでは外国人であるとは思わずに対応され、その場所の教育レベルが低いという感想をもらしている。今日インバウンドで多くの外国人で賑わっていることはまさに隔世の感が強い。その後白山へ向かうのであるが、どの道を辿るかに苦慮している。そして、白山への登りは険しく、^{ごうりき}強力に助けられ杖の下に金属を付けた金剛杖に頼って雪道を難儀して室堂に向かった。また、いくつかの場所で川を渡渉せざるを得なかったが、その時草鞋を用いる便を感じている。山頂ではその素晴らしい景観に感動するも、登路の困難さゆえに、一旦飛騨側へ下って神通川を下って立山へ向かうという計画を変え、金沢側へ降りた。白山での採集品は、アオノツガザクラ、イワカガミなどである。

立山：北陸道は新道を経て高岡へ達し、富山を経て立山へ向かった。立山へは常願寺川に沿って谷を遡ったが、雨の降る

中沢筋を川に沿って右に左に曲がりながら遡行した。その後、気圧計の値が上がったことで早朝から出発したところ、果して好天となった。その途次、「籠の渡し」では急流に渡された綱に括りつけられた籠に載って渡ったが、その移動はまさにハラハラであり、その移動は人力に依っていた。なんとか^{あしくらじ}芦峯寺に達し、さらにくねくねと曲がる九十九曲がりを経て室堂に向かった。その途次で火山活動の盛んな地獄谷とその結果生じた火口湖を巡って室堂に達した。そこでは立山講信者の泊る施設に泊ったが、狭隘と吹き付ける風を遮ってくれないことに閉口しており、その困難度は白山の室堂とは比較にならないと述べている。そして、立山の山頂では類のない眺望と素晴らしい景観に感動し、立山での神事にも参加している。そこでの神仏混交の祭事に興味を示している。立山での採集植物は、ハクサンイチゲ、ヨツバシオガマ、オオバユキザサ、コバイケイソウなどである。その後、針ノ木峠方向へ向かい、黒部谷を越えて大町に達した。

下山後は、大町から低い峠を越えて上田へ出て、碓氷峠を経由して東京へ帰った。通算 700km 余の大旅行である。東京へ帰着したのは 8 月 15 日で、正味一ヶ月にわたる長旅であるが、これまでこの報告が余り引用されることもないので敢えてここに紹介した。

筆者の体験

ここで筆者の個人的体験を加えたい。八ヶ岳の麓に育った筆者は小学 5 年生の時、阿弥陀岳に登り、そこでチシマギキョウに目を見張り、6 年生の時には硫黄岳、横岳、赤岳を回り、そこでコマクサ (図-3) を見、ウルップソウを見て感動した。それは長じてサトウの次男武田久吉の本で (武田 1963)、1900 年頃彼を含む日本の植物学者がその領域に注目してい



図-3 コマクサ

このコマクサは赤岳頂上近くで大阪大学名誉教授故柴岡弘郎博士により撮影されたが、硫黄岳のそれらの群落があまりにも人の手が加わったものと感じられたからである。柴岡博士と筆者は長年の約束を果たすために2008年8月初旬に八ヶ岳へ登ったが、その時の記録である。

ることを知って、自らの感動は十分に理由があることを知った。しかしながら、アトキンソンの報告はそれを20年もさかのぼるのであり、この論文がその後の日本の植物学者に与えた影響が少ないように見えるのはなぜだろうか、というのが筆者の感想である。しかも、植物種の同定に未だ修行中ではあったとはいえ、後に植物学教授となった松村任三が行っているのである。もう一点気になる点があり、ここで報告されている植物標本がどこにおさめられているか分からないのである。また、上記では各地で採集された植物の一部にふれたが、学名で表記されている114種の植物種は今日の表記とは若干異なっているものもある。東京大学の植物標本(TIと略称される)に詳しい東京大学名誉教授邑田仁博士にも調べ

ていただいたが、東京大学の標本室には入っていないということであり、それらの探索は現代的意義があろう。なお、アトキンソンはイギリスへ帰国後はウェールズのカーディフ大学の教授なったということを知ったので、先方に照会したが、まだその返事は得られていない。そういった意味でも、この論文は更なる解析が必要であろうと述べてアトキンソンの論文の存在が人々の目にふれればよいと述べて本稿を閉じる。

文献

Atkinson, R.A.: Asiatic Society of Japan 7, 1-57 (1879)

武田久吉, 原色高山植物図鑑, (1963) 原色日本高山植物図鑑, 増訂版, 保育社